



本多日生上人名著在庫品特價提供

- 一 聖 語 錄 改版 特價 金壹圓八拾錢 送料共
- 一 日蓮主義本領 全 金貳圓拾錢
- 一 法華經要義 全 金貳圓五拾錢
- 一 日蓮主義心髓 全 金壹圓五拾錢
- 一 日蓮主義精要 全 金貳圓九拾錢

礦部滿事謹輯

一本多日生上人

特價 金壹圓七拾錢 送料共

申込所

東京市外南品川妙國寺境内

「統」發行所

振替東京五一〇七一番

一月「教」誌

東京市外南品川妙國寺境内

「教」發行所

振替東京一〇九四〇番

目 次

自覺・反省	日生
十章鈔講義	村上壽
宗教家諸君に望む	上村辰
何人の罪か	中村清
阿含の根柢を探りて(其一)	波子
善知識は大因縁	
記		
○見聞録		
○教報		
○閱費誌料領收		

第三十七年六月號

統一定價	
一年	金壹圓貳拾錢
半年	金貳圓貳拾錢
送料共	送料五厘
事之金前	

統一廣告料	
表紙	金貳拾
一頁	金拾
二頁	金九
三頁	金五
四頁	金四
五頁	金三
送料共	送料五厘
事之金前	

昭和七年四月廿四日印刷納本 (第四百四十六號)
昭和七年五月一日發行

不許複製

編輯兼 礦部 滿事
 發行人 鈴木 日雄
 印刷所 東京府在原郡品川町南品川百八十一番地
 電話高輪六〇二四番
 振替東京五一〇七一番

發行所 統一發行所

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

自覺・反省

爾ノ時ニ東方ノ諸ノ小國王、大王ノ至レルヲ見テ銀粟ヲ以テ銀粟ヲ盛リ、銀鉢ヲ以テ金粟ヲ盛リ、來リテ 王ノ所ニ趣キ拜首シテ白シテ言サク、善來大王ヨ、今此ノ東方ノ土地ハ豊樂ニシテ人民熾盛ニ、志性仁和ニシテ慈孝忠順ナリ、唯ダ願クハ 聖王ヨ、此ニ於テ治正シタマヘ、我等當ニ左右ニ給使シテ所當ヲ承受スベシト。

時ニ 轉輪大王、小王ニ語ツテ言ク、止ミネ止ミネ諸賢ヨ、汝等則チ我ヲ供養スルコトヲ爲シ已レリ、但ダ當ニ正法ヲ以テ治メテ偏枉セシムルコトナカルベシ、國內ニ非法ヲ行ゼシムルコト有ラシムル無カレ、此ヲ即チ名ケテ我ノ所治ト曰フト。

時ニ諸ノ小王此ノ教ヲ聞キ已ツテ則チ大王ニ從ツテ諸國ヲ巡行ス。東海ノ表ニ至リ次デ南方、西方、北方ニ行キ輪ノ到ル所ニ從フ、其ノ諸ノ國王ハ各其ノ國土ヲ獻ズルコト亦東方ノ諸ノ小國ノ比ノ如シ、時ニ 轉輪王既ニ金輪ニ隨ツテ四海ヲ周行シ、道ヲ以テ開化シテ民庶ヲ安慰シ、已ニシテ本國ニ還ル、時ニ金輪寶ハ宮門ノ上ニ在ツテ虚空ノ中ニ住ス。 —長阿含經—
我が建國ニ前後シテ不思議ナル 教主久成ノ釋尊ノ謚言ナル哉。我等何等ノ幸ゾ 是ノ 轉輪聖王ノ國ニ生ラ稟ク、而カモ眼前ノ事實ヲ如何セン、願ミテ倍々反省自重セザル可ラズ。
南無釋迦牟尼佛 南無妙法蓮華經

内外多事多端、益々國民精神の振作更張を要するに際り、特に本講義を讀彦と共に精讀致したく思ひます。

十章鈔講義

一、緒言

日生上人

この御文章は天台大師の「法華止觀」といふ書物に就て日蓮聖人の考を述べられたのでありまして、十章といふのは「止觀」が大體十段に分つて説明されて居るので、即ち大意、釋名、體相、攝法、偏圓、方便、正觀、果報、起教、旨歸といふ十段である、その「止觀」の大體を評論すること故に「十章鈔」と題してあるのであります。これは文永八年五月、日蓮聖人の聖壽五十歳の時の御撰述であります。この年佐渡の國にお移りになつたのであるけれども、それは十月の末の頃であつて、この書物は五月に出來たのでありますから、やはり佐渡以前の書物であります、のみならずこの書物は三位公といふお弟子が比叡山に學問をして居られる所へ送られたのであつて、天台の學問に關しての意見を述べられたので、十分な日蓮主義の信仰の正意を發揮せられて居る書物ではありませぬ。けれども天台の「止觀」と日蓮聖人の教義との關係は大事な問題であり、古來之を「台當の遠目」と稱して、天台大師が法華經に

依つて宗旨を建てられ、同じく日蓮聖人も法華經に依つて宗旨を立てられたが、そこに違ひがある、それはどういふ違ひ目があるかといふ事を見るには、天台大師學生の書物である『止観』と、それから日蓮聖人の之に對する見解とを比較して見なければならぬ、而して日蓮聖人の『止観』に對する御趣意を明かにすれば、自らこの台當の違目が解つて來る次第であります。

所が中世日蓮主義の學問が、檀林に依つて研究をせられる時分にいろいろ弊害を生じて、殊に天台學の方に墮落致しましたから、大部分の日蓮宗の教義と稱して居るものは、寧ろ天台すりといつて、昔からこの弊を天台の袋擔と稱して居るのである。折角日蓮聖人が獨特の教義を立てられたものを、徳川時代の檀林の學風が天台の書物ばかりやつて居つたものであるから、却て天台の方へ墮ち込んでしまつた。立派な學者といふのが皆頭腦が天台主義になつて居るので、その學問する學校の本尊として祀つてあつたものは、天台大師一體である、日蓮聖人の木像も無ければ曼荼羅も無い、其處で學問をして居るのでありますから、朝晩動行をするのでも、天台大師の木像に對して動行をして居る、講釋する書物は入學の初から卒業の終りまで天台の書物ばかり、日蓮聖人の御文章などは一冊も研究はしないで、數百年間やつて來たのであるから、腐らざるを得ぬのである。學者といふのがその位である、あとは學問せぬのであるから、これは俗物であつて、大本教も天理教も同じやうなものである、八卦見や人相見と同じやうなものであつて、何も知つて居る者ではない、少しばかりのお經を覚えて御祈禱か何かして誤魔

化して生活をして居る者である、そんな者がさらに居つた。それ故に日蓮主義の教學上に於ける大きな間違ひは、天台主義に墮落した點に在るのである。その間違を明かにするには、この『十章鈔』を研究すれば日蓮聖人の思召が能く解るので、設ひ何百年檀林で學問をして居つたにしても、日蓮聖人の正しく書かれたこの『止観』に關する御意見が斯の如く分明である以上は、この祖意に反することは出來ない次第である、この意義に於てこの書を御紹介をして置かうと思ふのであります。この原本は今尙ほ存して居るので、日蓮聖人の書かれた儘の御眞筆が、下總中山の法華經寺に現存して居る、誰でもそれを拜見することが出来る譯である。

この當時比叡山に於ての學辯があつて、それは大體に「開會」といふことを誤解して居つた。法華經は廣い教であるから、如何なるお經でも、又廣くは世間の他の教でも開會といふ事をするのである、開會といふのは塞がつて居るものを開いて、その意味を明かにして行くのである、法華經の思想を以て『論語』でも『孟子』でも、又日本の神ながらの教でも皆これを開會するといつて、隠れた義理を現はして行くのである、これは法華經の偉大な所である。所がこの開會の仕方を誤るといふと、そこに混亂を生じて來るので、廣く物を許すやうな意味になる爲めに、何でもかんでも構はぬ、俗に法華勸請と言へば、狐を祠つても理を祀つても構はぬ、「これは法華勸請でやつたんだ」といふやうな事で、いろいろの迷信が起つて居る、これ等は皆開會といふ事を誤解して來た爲めである。その間違を起さぬやうに警告

を興へたまひしが、この書を送られた御趣意である。そこが能く打込んであつたら、今の雜炊法華は起らないのである、あれは開會の権が弛んだので、やはり同じ系統の間違ナンである。

それからいま一つはこの開會の思想から二圓同と申して、法華經より前のお經に説いてある「圓教」といつて善き部分があります、その爾前の善き部分——即ち圓と、法華の圓と同じといふことを極端に考へるやうになつた。爾前の教の中には圓といふ完全な教と、三角のやうな偏つた教と、或は四角なやうなのと細長いやうなのと、いろいろある譯である、法華經は純圓一實と言つて、圓滿なものばかり寄つて居る所の完全な教といふのである、爾前の方は雜圓と言つて混つて居る、法華經は純圓と言つて純粹の圓ばかりである。これだけ考へたら違ふことが分る筈だけれども、この爾前のいろいろある中の圓いものだけを出して来て、さうして法華の圓と比べたならば、法華經の圓も同じものぢやないかといふ考になつて来た、法華經より前にも善いものも少しはあるから、悪い所を除つて善い所だけ持つて来れば同じものになりはせぬかといふ議論が、抑々法華と法華以前の教とを混亂せしめることになつた。

その二圓同といふ事を日蓮聖人が嚴しく攻撃せられたのがこの「十章鈔」である。これは思想を擲く上に於て寔に大事なことナンで、今のやうな話をして居ると古い事のやうに考へられるけれども、この嚴密なる法華經に依つて研究せられたやうな方式は、今の思想問題に應用してもその儘役立つのである。例へば日本の文明に依つて世界の文明を開會して行くといふ場合——文明は決し

て孤立であつてはならぬから、日本の文明だけが切離されて小さいものになつてはならぬ、世界の文明を吸収して、その善きを採り惡きを捨て、大いに日本の文明を發達せしめやうとする、それには開會といふ思想で行かなければならぬ、即ち「智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」といふ事は、この開會風の觀念である。それをやつて行く時に権がちよつと弛むといふと、所謂西洋かぶれの思想になり、新しがりといふやうなことになる、從來あつた思想を攻撃して、初めは從來の文明の方から許して貰つた奴が——即ち廂を借りて主家を取つてしまふといふやうな工合に、西洋の思想が反抗的に出て来て、我が從來の美しき文明を破壊せんとする運動に就くのである。それ故に容れるに就ては、急所を抑へて居らなければならぬ、始終手綱を緩めぬやうにしなければならぬ。例へば日本が朝鮮を併合したのでも、手綱の執り方が悪いものであるからドタバタするのである、それは十分に優しく教化はして行かなければならぬけれども、寛嚴宜しきを制して、さうして今日のやうな動亂を起さすやうなへまな事をせぬやうにしなければ、併合の目的を全うすることは出来ない、寛大にするといふ事は宜いけれども、寛大の爲めに動亂を起さすといふ事になれば、それは政策を誤つて居ると言へる。思想の問題に就て、廣く世界の思想を容れなければ氣が狭いと言はれて、氣を廣くやつて行くのは宜いけれども、餘り擴がり過ぎて権が弛んで、それが纏りが附かぬやうな事になつてしまふ。多く思想の問題に過ちを取るの

つたが、今はそれがどうなつたか解らぬ事になつて、念佛宗の爲めに蚕食され、禪宗の爲めに蚕食され、眞言宗の爲めに蚕食されて、天台、傳教の立て給ひし法華經中心の佛敎といふものは廢たれ果て、しまつて居る、考へて見給へ、今日何も無いだらう。桓武天皇の御歸依を得て、南都六宗を統一し、日本の佛敎の根本道場を建てた天台宗としては、今日の有様は何であるか、居候の爲めに主人が座敷牢に抛り込まれたやうな譯になつてしまつた、座敷牢なら未だ宜いけれども、叩き出されて門の外で乞食をして居るやうな事になつてしまつて、一つも法華經の眞價を發揮する運動は起らないぢやないか。東京にも天台の寺は澤山あるでせう、有名なものは淺草の觀音であるが、併しあれは觀音といふものになつてしまつて、あれが法華經中心の宗旨だといふやうな色彩は何もありはせぬ、鳩ボツボが居るだけの話ぢや、又不忍の辨天も即ち天台宗であるが、世人は辨天といふ事は知つて居るけれども、あそこが法華經の眞價を發揮して居るものぢやといふ事は少しも分りはしない、何とかいふ金の出来る錢入の袋みたやうな物を出す所だといふ事になつてしまつて、明白に法華經の威徳を發揮することが廢つて居ることは明かなものである。それは初めは非常な立派な開會の思想で、天台の學風は出來て居る、けれども大事な一つのきごめの所が弛んだが爲めに、今日のやうな墮落した有様になつたのである。日蓮主義も日蓮聖人は嚴密に注意してあつたけれども、檀林の學風が天台すりといつて、そこに籠が弛んだから、今日のやうな雜炊法華が出來た、それが無ければ日蓮主義が斯の如き状態に陥るべき性質の宗旨ではないの

である。これは政治上の事情や何かから、徳川政府があらゆる學校をさういふ風に政策上やつた、最初は硬骨の日蓮主義者が反抗したけれども、それは或は鼻を削られたり、耳を削られたり、非常な壓迫を受け、又善ささうな者は皆間引れてしまつて、流し者にされ、或は處を逐はれて、善ささうな者は皆間引いてしまつたから、あとは精ばかりになつてしまふ。善い人といふものは幾らも出來るものではない、それを三百年の間、狙をつけて、彼奴はものになりさうだといふと間引いてしまつた、だからズーツと精ばかり残つて居る、非常な方法に依つて日蓮主義を腐らして來た、今日はその餘風を受けて居るのである。故に餘程覺醒して、日蓮聖人の眞精神に復活するといふ事を強く考へないといふと、在來の日蓮宗の状態では、今までが腐らされて居るものであるから、日蓮聖人の思召には適はない譯である。斯くて孰れも開會の籠が弛んで居る所のものである。

又二圖同の事も大切な問題であつて、外の國の文明に日本の善い所と似たやうな事が段々ある、例へば基督教の中から、日本の美風に似たやうなものを取つて來たり、西洋文明の中から似たものを取つて來るのは差支ないやうであるけれども、それは全然同じといふ事は言へないのである、似て居るから取るけれども、併しその本質に於て違ひがある、同じものでも違ひがあるといふ事を考へなければならぬ。人民の意思を尊重するとか、人民の幸福を保全するとかいふことは、無論我が建國の精神であるが、西洋で言ひ居る民意を尊重する、人民本意の幸福主義といふ事と、日本で言ひ居るのとは違ふ、さ

うしてどちらが成功するかといふ結果に至つては非常に違つて来る。民意尊重が行き過ぎると、遂に露西亞のやうなことになる、又亞米利加のやうなことになる、亞米利加が國家としては日本と外交上話合ふて、人道正義を守らうとしても、その地方に極端な民権を許して居るが故に、それをどう抑へる事も出来ない、今日は若し日本が嚴格なる態度を執つて行けば、そこに戦端が開かれる、戦端が開ければ何れにしても即ち人類の不幸である、日本が忍耐をして非常な深い考を有つて居るが故に、輕卒に戦争をしないだけのものである、これが五分々々で行くならば「貴様が貴様ならこつちもこつちだ」といふだけで、話は簡單なものである。故に西洋で民意を尊重するといふ事は、一應善いやうに見えるけれども、一歩行き過ぎるとそれが様々な害を爲すものである。英吉利の國家を経営するにも、餘りに民意といふ事を言つて居るが爲めに、今日は國家としての態度を決することが出来ない、非常な困難をして居る。日本に於ては民意を尊重するからと言つても、國家の進運を害するやうな事柄に就ては、決して左様な我儘の事を言はぬといふが、同じ民意の中にも先天的に前提が決つて居る、向ふは何でもやるといふ民意である、こつちは或る事柄はやらぬと決めて居る、同じやうに見えても違ふ。人民の幸福を保全するといふ事でも、向ふは人民が自己で自己の幸福を開拓すると言つて居る、けれども日本はさうでない、どうしても皇室を中心にし、國家の結合を強くし、さうして人民相互は力を協はせてその協力的に個々の幸福を保全するのである。個々の所謂個人の自由に依り、個人の權利に依つて幸福を保全す

るといふ方法と違ふ所がある、國家全體の統合といふ事の方が、個人の自由より重しと云ふを前提として居るのである。それであるから彼が言ふ所の民意であるとか、幸福であるとかいふ事は、ちよつと善い事のやうでも、それをその儘取つて來るといふと違ふ、同じ國でも違ふのである。同じ芋でも、筋のある芋もある、上から見たら同じさつと薯でも、非常に不味いのもあれば美味いものもある。日本は日本的の一種微妙なる道徳があるので、そこがどうしても違ふのである。その通りに似て居るものを持つて來るのは宜いけれども、迂つかりしてはいかぬ、どこ迄も「似て居つても油断がならぬ」といふ警戒を加へて行くのが二國同に對する所の注意である。總ての問題が其處に大事な注意を要すると思ふのである、今の日本の固陋な人のやうに、一概に世界の文明を怖がつて、さうして舊い文明にのみ立籠らうとすることは無論いかぬ、又歐米の文明に心酔して、一も二も世界の思想が善いやうに考へて居るのも無論問題にならぬことである。所がこの二つしか日本には無いやうにも見える、日本の過去の文明に根據を置いて世界の文明を開會し、そこに嚴密なる注意を拂つて、やり損ひをせぬやうに、堂々として世界的文明を攝收しやうといふだけの決心を有つて居る者は、殆んど見當らないやうに思はれる。恰度その格を考へるのにこの「十章鈔」が宜いと思ふのであります。

それ故に舊い事が唯だ舊いやうに聽かれるといふのは、その人の頭腦が足らないのである。一個の方式といふものはそれが他に應用されるのであつて、この「止觀」に關して日蓮聖人が述べられるこの開

會に對する注意、又二圓同に對する注意は、今日の思想問題の解決方法に就て、立派な參考になることであらうと思ふ。さうして國が文明を開拓するといふ事に就ても、天台宗といふやうな宗旨がいろ／＼の思想を開會して、それが遂に失敗して今日に來つて居るこの經歷といふものは、思想の問題に就ては好き參考であつて、逆も小さい學者が一人や二人議論を吐いて居るやうな事ではない、堂々たる宗派を建て、さうしてその間に澤山に内からも學者が出、外からも學者が出、その中に遂に分裂を來して、比叡山から念佛も出れば禪宗も出れば、いろ／＼のものが出て終に本が廢れてしまつたといふ、斯ういふ事は他にその例を求めやうと言つても多くは無いことである。この堂々たる思想を以て組織せられたる所の大宗派の、その成立とその失敗との状況を敷整とするのは、一國が思想を批判し、選擇する上に於て立派な手本となる事である。「そんな天台宗の事などが、何で日本の新しいデモクラシーの問題に參考になるか」と思はれるかも知れぬけれども、さうではない、この方が本格的參考である、唯だデモクラシーと言つて居るやうなものは、參考にも何にもならぬ、酔ばらつて踊つて居るやうなものである。そこでこの御文章はさう長くはないのでありますが、私は大體科段を九つに分けて見たのであります。

一、本文

一、二圓同の謬見

第一には二圓同の謬見といふ事を論ぜられたので、これは他の宗旨に於て、前に申したやうに法華經の中の圓行といふ完全な説明と、他のお經のそれに似たやうな略々完全と許さるべき思想とを寄せて來て、それが同じものだといふ考を言ひ募つて、さうして一旦同じだといふ所で引つけて置いて、今度また或る理由を附けて、法華經よりこの方が善いやうに言はうとする。今日の新しい思想でもさうである、デモクラシーの思想でも、初めは日本の斯ういふ事と同じものだと言つて引つけて行き居る、「さうかな」と思つて迂つかり聞いて居る、その内に今度は離れて、「實はデモクラシーの方が善いんだ」といふやうに出て行くのである、最初から違つたものだと言つたのでは人が受入れないから、「イヤそれと同じやうなものであります」と言つて出て來て引つけて居つて、その内に勢力を得て來ると「實は此處が違ふのぢや、こつちの方が善いのぢや」と言ひ出す。だからデモクラシーも初めは民本とか、民意とか言ひ居るが、終ひには民主といふやうな事を言つて、段々にその本音を吹き出すものである。そのやう方を他の宗旨が皆やつて居るといふ事を論ぜられた。

先づ華嚴宗が、華嚴經の中にある「圓」といつて圓滿な説明と、それから法華經のその説明とは同じいといふ事を言つた。併しこの「圓」といふのは何に就て言ひ居るかといふ事を考へなければならぬ、さう

すると宗教の本質では、第一宇宙に關しての説と、それから人身に關しての説と、佛陀に關しての説と、この三つに就て完全不完全といふことが争はれるのである。そこで華嚴經は宇宙に關しては法界圓融といふ事を説いて、先づ餘程立派な思想が現はれて來て居る、けれども人身觀の方に就ては二乗作佛を許さぬと言つて、菩薩だけの方に圓滿を許して、二乗はこれを斥けて居る、佛に就ては久遠の本佛も顯はれて居らず、説明が缺けて居る、であるから圓といふ事を許すならば、この法界圓融といふ宇宙觀の點に於てだけ許されるのである、その他の二つに就ては圓にはあらずして「偏」といふ、かたよつて居る。三つの大事なものの中に二つは偏である、詰り三角が二つと丸が一つと言つたやうなものである。その丸だけ出して來て「これは法華經と同じぢや」と言ふ、その同じぢやといふ言葉に引張られた爲めに、今度は同じものならば華嚴經の方が前に説いた、法華經は後に説いた、同じものならば前の方が宜いぢやないか、二度目に言ふのはモウ積みたやうなものぢやないかといふので、本末といふ事を説いて來て、同じ圓であるならば華嚴の方が本で法華は末である。斯ういふ事を言つて華嚴宗といふものが立つて來るのである。日蓮聖人が法華經以外の圓を許さぬといふのは、圓といふ事は宇宙、人身、佛陀、この三つに關してどれも完全に説かれなければいけない、宇宙の説明だけ出來ても、人身觀と佛陀觀の二大教義に於て缺けて居つては圓でないといふので、二乗作佛、久遠實成の二大教義が法華經以外にはない、此點から圓を論じたならば、二圓同の説は壞はれてしまふといふ事を『開目鈔』に盛んに説かれた

のである。所が天台の「止觀」などをやつて居る者は、「止觀」がやはり諸法實相の宇宙觀の方へ偏つて居るものであるから、この宇宙觀だけしか見て居らぬ、そこで法華の圓といへばやはり諸法實相、華嚴の圓と言へば法界圓融、これは同じものぢやと考へてしまふ、さうして人身觀と佛陀觀に於ける大なる相違を逸してしまふのであります。

今日の日本で言うても、唯だ一般的に民衆一般の人權とか、平等とかいふ事を汎々たる意味に於てデモクラシーとして論じ居る、けれども日本の歴史的の民族性、國民性といふことになつて來ると、世界の他の國とは特色のある違つたものがある。殊に國體に於て皇室の存在する事は、これは亞米利加の大統領などとはまるで違ふので、丁度佛敎でいふ佛陀觀のやうな國體、皇室、人身觀に當たる民族の國民性から論じて來たならば、世界の汎々たるデモクラシーの思想とは大なる相違がある。この点を明かにしないで、民權ちや平等ちやといふ事が同じものだとして、今度は民主的といふやうな事を言つて、一方の大事な所を忘れて此處でワーツとやらうとする。總べて思想の誤魔化しはさういふやうに行くものである、眞言宗などもさういふ事をいふて來て、これは宇宙觀の法界圓融といふ事は法華經も眞言も同じ事である、所が眞言の方は「印」と「眞言」といつて、手で印契を結ぶ事と、口で眞言を唱へる事のこの二つは眞言の方が善いといつて、同じ武士だけでも法華經の方は裸の武士である、眞言の方は鎧を着せて刀を持たせたやうなものぢや、だからこつちの方が強からうといふやうな事を言ひ出す。一旦は

こつちに引つかなければ、いきなり打突つて行つたならば直ぐやられてしまふから、何處かで引ついでさうして誤魔化して行かうとする、二圓同といふものはさういふ悪企みがあるのである。西洋文明に心酔して居る學者の説き方も酷似して居る、クロボトキンが相互扶助といふのを引いて、相扶けるといふことが何處が悪いといふ、けれども相扶けるが爲めに國家を破壊し、從來の文明を破壊し、宗教を破壊するに至るから、それが悪いのである。それを「相扶ける」といふ事は結構ぢやないか、お釋迎様も助けると言つた、クロボトキンも助けると言つた」といふやうな事を言つて居る、そんな事に乗つて行つては駄目ぢや。彼等は少しく似た所を引つけて、それから油断をさして置いて悪い所に持つて行かうとするものである。

それを日蓮聖人が此處に論じて、華嚴宗が華嚴經には法華經と同じ圓があると言つて、而も華嚴の方が本ぢや、法華は後で説いたから、前後の差に於ては法華經が劣るといふ事を言ひ、或は法相宗や三論宗に於ても似たやうな事を言つて、或は般若經に依つて法華經に引つけて見たり、或は深密經を以て法華經に引つけて見たりして、一旦引つけて置いて、今度は或る事を加へて「イヤこの方が勝れて居る」といふやうな事を言ひ出すのである。所が天台の學者がその手段を看破することが出来ずして、それはお前の言ふ通りぢやと言つて、斯の如き二圓同の説に保証を與へて、「それは尤だ、天台大師の考もそれだ」といふやうな事をいつて、太鼓を叩き、提灯を持つて行くといふ事は、怪しからぬことぢや。そんな事ならば法華經を中心にして天台宗を建てる必要は何處にあるか、左様な点に於て同じといふ事を輕々しく許すが故に、却て法華經がけなされるやうなことになる。丁度法華經と涅槃經が同じ圓教であるといふ事をいふ時に、法華經が前であるから涅槃經が劣るといふが、その筆法を以て法華經より前のお經に圓教があるならば、その方が早い、法華經は後であるからその方が勝れるといふやうな意味を言ひ出すのである。それに似たやうな言葉は「玄義」の二の卷に

此の妙と彼の妙とは圓實異ならず。

といふ事がある、又「玄義」の九の卷には

圓頓義齊し。

といふ事がある、それは宇宙觀に就て法界圓融とか、諸法實相とかいふ事を説明した点が、法華經以前のお經にもある、華嚴經にもあれば圓覺經にもあれば楞伽經にもある、いろ／＼あういふ風な説はある、この宇宙の諸法が圓融無礙なるものであるといふ事は多くの大乘經に説いてある、それは法華經の諸法實相の義と相似て居る、けれども人身觀と佛陀觀のこの實際の問題に就て考へて見たならば、よるて違つて居る、他のお經に於ては二乗の成佛を許さぬ、女人の成佛を許さぬ、悪人の成佛を許さぬと言つて、實際の人の問題に就て圓融が言へなくなる、宇宙の原理に於ては圓融を説くけれども、人の問題に就て

は男と女が違ふとか、賢い者と愚かな者が違ふといふ事になつて、平等に皆が成佛することを許されて居らない。法華經にはそれが皆圓滿に、人の問題に就ても平等が許されて居る。又佛様の方の事に就ては、無論他のお經に於ては本佛が顯はれて居らないのである。そこを考へないものであるから、それが爲めに間違が起つて來る。殊に天台の「止觀」の中には、いろ／＼華嚴經の文を引いたり、その他のお經を引いて、それが自由に使つてあるものであるから、開會といふ事の縁が弛んで考へて行くと、ごのお經でも同じやうな意味に思はれるのである、それが間違の本である。今の日蓮宗に於て考へれば、法華勸請と言つて、鬼子母神様でも帝釋様でも、その外澤山祀つて居るそれを皆同じやうに思つて、信心の對象にして居るけれども、さういふ事は非常に間違つたことである、本尊として日蓮主義者の定むべき所のものは、統一されて居つて、孰れも一つの所に基かなければならぬのである。丁度我が國體が儼然として立つて、七千萬の國民皆皇室を仰がんならぬと同じ事であつて、そこに分裂を許すべきものではない。

一、止觀と法華經の關係

それから第二段に至つて天台の「止觀」と法華經との關係を明されたのであります。當時天台の學者には、法華經よりも「止觀」の方が勝れるといふやうな考へまで有つて居つた、これはどの宗教にも起

る間違ひで、日蓮宗にも同じ謬見があり、日蓮聖人の方がお釋迦様よりえらいと思つて居る人がある、或は日蓮聖人の書かれた御文章の方が法華經より上だと見て、現にさういふ事を言つて居る人もある、「法華經と雖も日蓮が無ければその眞價は分らぬ、故に日蓮を通して」といふ、その通はしてといふ言葉が行き過ぎて、日蓮聖人の方が上だといふ考へは餘程廣く起つて居る。それ故に日蓮宗に行けば、池上へ行つても祖師堂の方が釋迦堂より大きくなつて居る、淨土宗の智恩院へ行つたならば、法然上人を祀つてある所の方が大きい、本堂は焼けて阿彌陀堂といふものは永い間建つて居らない、未だ多分建つて居ないだらう、さういふ工合に祖師がえらくなる、眞言宗に行けば大日如來などは分らなくなつて、唯だ弘法大師を「お大師様、お大師様」といつて有難がつて居る。さういふ事は起り易い弊害であるが、日蓮聖人がそれを攻撃して居られるのである、その攻撃した教を奉ずる主義者でも、やはり又間違つたことを繰返す、それは無學の馬鹿が多いからである、それ程注意してあつても尙ほやり損ふといふは確に馬鹿である、注意せられずにやり損ふのは已むを得ぬけれども、注意してあるのにやり損ふ。それは以何に天台の「止觀」が善いにした所が、法華經より勝れるナンといふ事は天魔の見である、「止觀」は法華經の述門から出た、本門から出た、本述二門に至るといふ三つの義に就て古來議論があるけれども、法華經を離れて天台の「止觀」が獨立的に成立つといふことは、誰もいふ事は出來ない、その三つの説は違ふにしても、法華經に依るといふは動かぬことナンである。殊に天台の教觀は總べて法華

の開會の上に立てられたものである、即ち日蓮聖人の御文章に依れば

止観一部は法華經の開會の上に建立せる文なり、爾前の經經をひき乃至外典を用ひて候も、爾前外典の心にはあらず、文をば借れども義をば削り捨てたるなり。(續遺)

てたるなり。(六七四)

この言葉が大事なのである、何を引いて来たからと言つても、法華經の高い精神からそれを活かして引いて来るのであるから、法華經から離れたら元の空阿彌ぢや、法華經に依つて上に引上げてやつて居る思想であるから、法華經に反抗した時には皆ひつくり返つてしまふ。恰度朝鮮が今動亂し居るが、あれは併合したとはいふけれども、日本が保護を與へた爲めに朝鮮の國民の幸福は保全されて居る、これを反抗して日本から手を切つた時には、直ぐ過激派にやられるか、誰かにやられてしまつて、朝鮮人の運命は悲惨なることになるであらう。日清役の時には、朝鮮の獨立を支那が脅すが爲めに、日本がこれと戦つた、その後又放任して置けば露西亞の爲めに舐められさうになつた、朝鮮が舐められるのみではなくして、その禍ひは日本にも及んで日本の獨立を危うするから、己むを得ずして朝鮮併合が起つたのである。蛇に呑まれんとする者を助けて座敷の上昇げて御馳走を食はしてやつたやうな話である、それを日本に双方向つて手を切らうとする、手を切つたならば又元の通り蛇に呑まれてしまふのである。その通

りに他の書物などが引いてあつても、皆法華經の大理想から活かしてこれが應用されて居るといふ事を知らなければならぬ、それを法華經を輕んじ法華經の力を忘れて仕舞へば元の空阿彌で、やはりその思想は低いものになつてしまふのである。大体日本の思想問題に就て考へたならば、從來の偉大なる皇室なり大和民族の特色を嚴密に維持して、さうして世界の思想を採用して行かなければならぬ、そこを少しでも忘れるとか、それを抑へつけるといふ事になつたならば、直ちにその思想は害を爲すので、決して我國を利益するものではない。

その事を段々此處に論ぜられて、さうして「止観」の十章ある中の前の六つは、無論これは迹門の經の意に依つて書かれたものであるし、それから第七の「正観」と言つて正しく止観の觀法を明した以下は本門の意に依つて居る、そこに一念三千の教義を天台が初めて立てられたのであります、併し一念三千といふ事は、究極して論ずれば迹門にすらこれを許さない、斯う書いてある。

一念三千と申す事は迹門にすら尙ほ許されず、何に況んや爾前に分絶へたる事なり。一念三千の出處は略開三の十如實相なれども、義分は本門に限る。爾前は迹門の依義判文、迹門は本門の依義判文なり。但だ眞實の依文判義は本門に限るべし。(續遺)

(六七五)

此處が非常に大事な所である、これはどういふ意味かといふと、一念三千の教義は述門から一通り出たやうに思ふけれども、本當の義理は述門に於ては許されなないといふのである。この「一念三千」といふ言葉は、方便品の十如實相——如是相、如是性、如是性の文から出たのであるけれども、その義理合といふものは本門に限つて居るのである。それ故にこの「依義判文」といふ事を知らなければならぬ、これは深い方の教の義理に依つて、浅い書物にある文章を判断して行くのである、法華經の義理に依つて「論語」の意味合を啓發して行くといふと、「論語」の文章でも立派に活きて來るのである、その通りに法華經の述門の義理を以て爾前のお經——法華經より前のお經を解釋する、即ち爾前は述門の依義判文であり、それから法華經の述門のお經は本門の依義判文である、本門の義理に依つて述門を解釋しなければならぬ。これはどういふ事かといふと、詰り前に言うた人身觀と佛陀觀の二つの思想を以て他の教義を觀て行かぬ限りには、一切の佛敎は活きて來ないと云ふのである。お經に説いてある所の文章その儘で役立つものは、本門の經文しか無いから、眞實の「依文判義」は本門に限ると言つて、そのお經の文に依つて義を判断せられるものは本門に限るのである、本門の方は少しも隠れなく眞實が説かれて居るが故に、文に依つて直ちに義を判する事が出来る。ドンドコ法華ナンといふものはそんな事も何も考へはせぬ、「一貫三百どうでも宜い」のだから、提婆品を讀んだら提婆品が一番有難いと思つて居る、提婆品の女人成佛でも、本門の本佛から離れた時には跡方も無く消えてしまふ。即ち「開目鈔」にある通り

「發迹顯本せざれば眞の一念三千もあらはれず、二乗作佛も定まらず、猶ほ水中の月を見るが如く、根無し草の波の上に浮ぶるに似たり」でヘナ／＼ちや。どうしても本門の壽量品に於て佛様の大切な意味合が顯はれた所から、一切を判断して行かなければならぬ、本門壽量品の文に依つて總ての佛敎の義は判釋して行かなければならぬ。法華經の總てを解釋するにしても、本門の壽量品の義理から見に行かなければならぬ、それをゴチャ／＼にしてしまつて、どつちからでも構はぬといふ事にしてやれるものではない、一番深い意味から見に行かなければならぬ。これを我國の思想問題に比すれば、皇室の尊嚴と云ひ、大和民族の三千年養ひ來つた大和魂と云ひ、武士道と云ふものは動かすべからざる大切なものである、それから一切を判断して、西洋の思想はこの義理に依つて——即ち我が國體に依り、我が皇室に依り、民族性に依つて、他の文明を判断して行かなければならぬ。但しそんな注意を加へずしてやれるものは、歴史的に發達したる我國の文化で、これはその儘判断される、西洋のものであつたならば、名前は同じでも、その義理は能く日本に同化せしめて、換骨脱體して日本の色彩のものにしなれば、その儘では役に立たぬといふ事を抑へて行くべきである。デモクラシーにしても、日本的に洗禮してやらなければならぬ、西洋のデモクラシーは日本文化の依義判文で、この日本の義に依つて彼の文明を判断して行く。我國に三千年許されて居る保證附の間違ないものは、國體の尊嚴、皇室の尊嚴、大和魂といふやうなもので、これは割引しなくともその儘で宜い、即ち本門の依文判義の如きものであ

る。それが顛倒かへつて来るから、本門の本佛などはそつちへ除けて置いて、速門で行つたり爾前で行つたりするから混亂するのである、大體一致派といふやうな方は、本文に衝突して速門の方を表に出さうとする、本門ばかり威張つたものぢやないといふやうなことで、相持ちのやうにやらうとする、それから念佛宗などは、何も法華ばかり威張つたものぢやないと言つて、これも相持ちのやうにやらうとする、そこでガヤ／＼して混亂してしまふのである。

大體日本人の佛敎に對する觀念は非常に幼稚なものであつて、左様な深い大切な事が説いてある敎も、平凡な敎も、これを混合することを宜い事と思つて居る。これは大變間違つたことである、世間の書物で言つたならば「論語」とか「大學」とかいふやうな聖賢の書物と、これを屬つた所の或は墨子であるとか楊子であるとかいふ異端の書物も、同じぢやない事と言つたならば、大變な間違が出る、それ故に聖賢の學を爲す者は異端と言つてこれを排して、さうして聖人の道統を發揮するのである。佛敎の上に於ては方便と眞實との關係に依つて、非常に意味合が違つて来るが故に、眞實を説いた法華經に依り、法華經の中には本門の義に依つて、一切を判斷して行くといふ事にしなければならぬ。日蓮聖人がその通り言ひ居る、さもなければ天台のやうに簡が強んでしまつて、即ち法華經の權威が無くなつて、居候の爲めに主人が叩き出されるやうになるといふ事を日蓮聖人は警告して居らる、その日蓮の警告の通り天台宗は今なつてしまつた。日蓮主義も今やつて居るやうな状態で行き居つたならば、やは

り詰らぬものになつてしまふのである。今の所では南無妙法蓮華經と口で言つて居るが、終ひには何と言ひ出すか分らない、今でも大分「一貫三百どうでも宜い」といふやうな事を言ひ居る、また私が東京に來た頃、今より三十年程以前には、池上のお會式に行つても、随分亂雑ではあつたけれども、さう無闇に一貫三百どうでも宜いと云ふ人は無かつた、たまに言ひ居つたものである、所がこの頃は初めから終ひまで一貫三百で、お題目は初め聲を擧げる時に「ナンメウ」と言つた切りで、ドンドコ／＼一貫三百どやつて居る、その工合は實に墮落して居る、あの調子で行くとなつてしまふか分らない。さうして萬燈を書いても「一天四海皆歸妙法」も宜かつたけれども、この頃は店で賣つて居るのを見て御覽なさい、狐の顔を書いたり何かして、いろ／＼變つたものが出來て居る、さうして「一天、四海、皆歸、妙法」と二字づゝ書けば萬燈に四面書かなければならぬけれども、そこへ狐の顔を描く爲めに「妙法」が抜けたり、或は「皆歸」といふ字が抜けたりするから、まるで對句にも何もならぬ、終ひには一天四海狐に皆歸するやうな事になつてしまふ。あゝいふ事は非常に恐るべきである、さういふやうな事でも、少し宛でもこれが嚴肅な意味に立て直されて行くといふのと、段々崩れて、眉毛が無くなつた、鼻の先が崩れかけたといふやうな工合に崩れかけて行き居るのは非常に違ふ。吾々少數者の言ふ事は効力が無いやうだけれども、併し一人唱へても正義の主張といふものは非常に響くものである、腐りたくても中々腐れない、餘程腐れを止める力があるものである、誰も言はなくなつて、私なら私が一人「それは

宜しい、さういふ事は結構だ」と言つたならば、それこそ一年で變る奴が三箇月位でグーツと變つてしまふ、それは恐るべきものである。そこを日蓮聖人が警戒を與へて行つたのである。(次續)

宗教家諸君に望む

—特に教化運動について—

文部省
宗教局長 下村 壽 一

私はこゝに教化運動に關聯して、世の宗教家に希望することがある。

更めて言ふまでもなく、宗教は信仰によつて人を善導するものであるから、教化は自らその中に含まれて居る。一方教化運動は單なる倫理運動でなくして國民の道德生活の向上を期する力強い運動であるから、どうしてもその根底に堅い信念を植ゑ付ける必要がある。

この點から觀ると、教化團體の仕事と宗教團體の仕事といふものは切つても切れぬ深い關係にあるわけだ、言葉を換へて言へば、教化團體の仕事と宗教團體の仕事といふものは、互に重り合ひ相交錯してゐて、その重り合つてゐる點は、いはゞ二人三脚の、中の脚のやうになつてゐると思ふのである。

勿論、宗教には教義は弘布宣傳すべき独自の立場があり、教化團體には教化團體としての独自の主義

綱領があるわけであるが、國民に働きかける仕事そのものは、前に述べた通り密接不離の關係にあるのであるから、宗教家は教化事業に對する十分な理解を持ち、教化従事者も亦宗教に對し、十分な理解を持ち、兩者相待つて精神生活の向上、道德の純化に努力せなければならぬと思ふ。特に今日の如く、國民思想の憂慮すべきもの、多い現状において、これが指導匡救の任にある教化従事者と宗教家とは、相寄り相扶け協力一致して、目的の遂行に邁進すべきである。

今更のことではないが、宗教家に對する非難の聲は昔から絶えない。宗教家は一體何をしてゐるのか、何もしてゐないではないか、儀式やお定りの行事にのみ没頭してゐて、社會的に何等存在の意義がないではないか。といふ聲が諸方面から起つてゐる。それに近頃はまた反宗教運動さへ起つてゐる始末である。この運動はその根柢を共產主義におくの

ではあるが、何等爲すこともなき宗教家に對する排斥の意味も加はつてゐることは、否定することが出来る。

宗教家はよろしくこれらの非難排斥に鑑み、從來のやうな傍觀的態度を改め、社會に進出してそれ／＼意義ある仕事をなすべきであるといふのは世の識者の齊しく唱ふるところである。それについては、いろいろの研究もあり、種々議論も交はされてゐるが、多數の意見は宗教家は社會事業に努力するが最適の仕事であるといふことに一致してゐる。宗教家の多くは廣大な寺院を領し、布施寄進等によつて相等の資力を有してゐるのであるから、經費の伴ふ社會事業をやるに最も適當してゐるといふのである。

社會事業といつても、從來の如き慈善事業では今日の社會組織には適當しないから、その施設の方法については、それ／＼研究を要するはいふまでもな

いが、とにかく生活上餘裕のある宗教家が進んで經費を伴ひ資力を要する社會事業に努力するといふことは社會的存在の意義を明にする所以であり、奉ずるところの教義にも叶ふ次第であるから、既設の事業に協力するなり又は獨立に事業を起すなり、社會組織の複雑となるにつれて益々必要なる事業に對し大に力を奮はれんことを切望してやまない。

しかし社會事業はそれ相當の資力がなければ出来ぬことであるからこれを何人にも望むといふことは無理である。そこで一般の宗教家に對しては何人も進んで教化事業に盡されんことを切望する。教化は已に宗教そのものの中に含まれてあるばかりでなく、これを端的に言ふならば、宗教を離れて道德なく、道德を離れて宗教はない。この意味において宗教家が進んで社會の教化に盡す事は宗教家たるもの當然の務ともいふべく、同時にその務を果す事によつて、自然に宗教家の社會的存在の價値を認めら

れることと思ふ。如上の意味合において世の宗教家たるものは、こゝに更始一新の意氣をもつて從來の宗教團體の活を入れるなり、新に獨立の團體を構成するなり、ともかく自己の信仰信念に基き熱誠をもつて教化運動に精進すべきである。

何人の罪か

上田辰卯

左傾ならざれば右傾、最近の思想界でよく中道を歩みつゝあるものは極めて稀である。緊縮にあらざれば膨張、萎縮にあらざれば放漫、金解禁と云ひ、再禁止と云ひ、何れも國家百年の計と肯けるものはないではないか。政黨は各々自黨あることを知つて國家あることを知らない、偶々正しい政治を高調する政治家があれば、そは政治を理解せざるものとして葬り去られてしまふ。

思想的にも、經濟的にも、政治的にも、真に行き詰

つたといふのは、今日の情勢を云ふのであらう。吾々は常にこれが改革を熱望して止まなかつた、そしてたゞその改革の動機が、何時、如何なる手段によつて口火を切られるか問題である丈で、必然的に近く来るべきは少しも疑はなかつた。果然！それは最も恐るべく、最も悲しむべき事變によつて齎されたのであつた。

x

x

x

暴力行爲は、如何なる場合でも、最も慎しむべき手段であることは論ずる迄もない。併し乍ら又同時に人間が、愈々他に講すべき道を失ふた時に、必然に而も何人にも共通に起る行爲であることは否定出来ない。彼の堂々たる帝國の代議士が議會に於ける暴行沙汰に徴せば、それは平業は極めて温良なる紳士でありつゝ、屢々その渦中に投ずるのを見ても明かであらう。個人修養の完成を誇る英國に於てさへ、而も神聖なるべき議會に、時に暴力行爲を見るといふに至つては、如何に人間には多分に動物性といふものが存在してゐるか知れる。人間は一度精神の抑壓を逸するとき、忽ち幾千年昔

の野獸性そのまゝが、勃然として據頭して來ることを、如何ともすることが出来ないのだ。

x

x

x

暴力行爲、直接行動は如上の點から見ても、或はある程度迄は不可避的のものであるかも知れぬが、こゝには唯我々佛教徒は、何時、如何なる場合でも、それは許されざる手段であること丈を記して、暫らくその可否の討究を後日に譲らう。

吾々は、その可否を問ふよりも先きに、もつと大きな教訓をこの事變の中に發見して、國民全體が反省し、懺悔せねばならないと思ふ。

少くとも吾々は、この悲惨な事實、多大なる犠牲を見て、只一遍の事相として軽く看過してはなるまい。何がか、る不祥事を惹起せしめたか、認れる制度の爲めなのか、腐敗せる政治家のためなのか、それとも或はもつと複雑せる原因であるかも知れない、否突嗟的の出來事かも知れない。併し乍ら私が考へるのには、それ等の斷片的のものでなくて、寧ろ其原因の根幹となるものは、近代人の通有性として常に罪科の源を他に求めて、自ら反省せず、徒に

政治制度を誹謗して、而も自分は何等建設的のものを考究することのない、かゝる思想の潮流が即ちそれであるのではあるまいか。罪を他に轉化し、害を制度に求めて、少しも自ら顧みて慚愧せざる思想が、やがて制度の呪咀となり、破壊となり、殺戮となるのではあるまいか。釋尊は有ゆる徳行は先づ慚愧の服を着よと教へられた。根本はそこにあるのではないか。

或者曰く不景氣を退治せよ、又曰く農民を救済せよ、又曰く政治を淨化せよ、又曰く何をせよ、曰く何をせよ。と、吾々は近代人の要求のあまりに多いのに驚くと共に、未だ嘗てかくすれば財界が救済され、かくすれば政治が淨化され、かくすれば農民が救済されるといふ、具體的政策を公示せるものを見ない。

眞に國を憂へ、眞に制度の改善を願ふなれば、鬭争、殺戮の前に、先づ制度の不備と、政策の過を指摘し、改善の道を示し、打開の方法を教えて、以て平和の裡に國利民福を計るべきではあるまいか。

何々團と云ひ、何々決死隊と云ひ、暴力によつて事

知れない。

制度が悪いといふなら、其制度の内容を詳かにし、以て爲政者及國民に向つて、從來の組織に依存するよりも、この新しい組織に依ることがより幸福であることを教ゆればよい。政策が悪いなら堂々と自己の政策を発表して政府にその實行を迫ればよい。

英國マンチエスターの一紡績職工は、食料品課税政策に對して、時の大英帝國の宰相と、大論戰を交へて遂に之を屈服せしめたではないか。

言論の戦は血をもつて解決を見やうとしてゐる現代のすさみに向つては、あまりに生温いといふかも知れないが、併し制度を改革するには、政策の變更を促すには公明正大にやることである、七百年前の日蓮聖人の採られた態度は、スピード時代の今でも決して捨つべきではない。其の主張に權威あり、正しければ人は殺傷せずとも、制度は必ず改善される、政策を變更せしむる底力となるであらう。見よ！武藤山治外數氏の唱へた金輸出再禁止論は、解禁を生命として立つた民政黨内閣の閣僚間に物議を醸して、遂に若槻内閣の崩解となつたではないか。

を解決しやうとする人々が、假りに財政、經濟、軍事、外交等百般の施設に向つて實行可能の堂々たる政策を持つにしても、所謂直接行動によつて、果して自己の理想が實現出来るものであらうか。試に考へて見やう。或者は金融資本主義の高度化を憤つて、二三の財閥を倒さんとして、團男爵を狙撃した。成る程團氏は三井財閥の巨頭であるに相違ないが、而も財閥は團氏そのものではない、團氏斃るれば、第二第三の團氏が出るであらうし、假りに三井一家を斃殺することが出来たとしても、それは決して財閥の覆滅でもなければ、金融資本主義高度化の阻止ともならない。世の中は騒然たる中に、依然として進むべき方向に進むに相違ない。

政黨政治に於ても同様である、成る程犬養首相の兇變は、政友會の大打撃には違ひない、併し犬養氏の死が直ちに政黨の死でないことは、恰も團氏の死が三井財閥の覆滅とならないと同斷だ。寧ろ放任すれば自然に分解作用を起すべかりし政友會を、偶々この外界の刺撃にあつて、反つて結束を固ふせしめて、その消散の期を遅からしめたことになつたかも知

x x x

政黨が、財閥に依て常に左右されつゝあることは、隠れたる事實である。政治家が兎角黃白によつて支配され勝ちであることも、公然の秘密だ。併しそれは未だ、今の制度に寄生するものゝある部分が、さうであるに過ぎないので、それを以て政黨政治は、金錢に依て動く制度なりと斷定することは極めて早計だ。立憲政治といふものゝ本體をよく見やうではないか。金錢によつて動く政治家を議會に送つたのは誰なのか。國民は金錢によつてその清かるべき一票を賣つた覺えはないか。一票を投ずるに當つて、その人の人格識見を正しく認識したであらうか、何が故に財閥に支配されざる清廉の士を選出しなかつたのか。不幸にして現代にはかゝる高潔の士を求めても得られないといふなれば、それでは最早如何なる制度をもつてしても、正しい明るい政治の行はれる譯はないではないか。若し選出を謬つたといふなれば、それは制度や政治家の罪と云はんよりも寧ろ國民自身の罪ではあるまいか。聖代未曾有の不穩事件に遭遇した吾々は、再びかゝ

ることのないやうに希つて止まない。それがために
は雷に制度を呪ひ、罪を他に求むることをやめて、
先づ各自が慚愧の服を着て、各々自己を眞剣に反省
し、懺悔しやうではないか。

阿含の根柢を探りて

(其二)

中村清一

涅槃とは

おおよそ宗教の目標とする最後の理想は何である
かといふに、生死と苦惱とによつて束縛せられたこ
の現實の五十年の短き生涯を超えて、永遠に滅び
ることなき眞實の大いなる榮光を得ようとする人間
の生命そのものに根ざしたる最深の希望を達せんと
する——たゞその一點にあることは今さらこと新し
く論ずるまでもない。佛教ではこの永遠の榮を「涅
槃」と稱し、之を「常、樂、我、淨」の四つの詞に
よつて形容してゐる。即ち永遠に易ることなき——
無限の悦樂——絶對の自由——純粹の美そのものこ

の間に、その事柄の成立する根本に於て何等か絶
對に混亂することの出来ぬ明確なる區分がなければ
ならぬといふことである。凡て物事には確たる理由
がなければならぬ。若し甲が常住であり乙が無常で
あるとするならば、甲をして常住たらしめ乙をして
無常たらしめる何等かの理由がなければならぬ。
こゝに於て、吾等が現實の遷滅無常のはかなき境涯
より涅槃に於ける常住不滅の確乎たる新しき境涯に
進まんとするならば、先づ吾等のこの現實をして無
常遷滅のものたらしめる根本の原因を探究し、この
根本原因を取り去ることによつてのみ眞實の不滅の
境涯に到達することを念願せねばならぬといふこと
になるのであらう。

諸行無常と諸法無我

釋尊がバラモン其他の前時代の宗教家の立場を乗
り超えて、佛教といふ最も根柢深き新しき宗教を建
設せられたその根本的な立脚地は即ちこゝにあつた
のである。吾等は先づ阿含の教によつてこの問題を
探究して見よう。抑も現實の一切が無常であるのは
何故であらうか。それは一切が因縁の和合によつて

そは人間の本來具有する底深き希望に他ならぬので
あるが、これに對し釋尊の觀察し給ひし所によれ
ば、現實そのものはあくまで無常であり——苦しみ
であり——我が儘にならぬものであり——不淨極ま
るものたるを免れない。そこでこの現實界に生れた
る吾等人間が如何にしたならば右の様な絶對の理想
に到達することが出来るかといふ點が、あらゆる宗
教家の苦心し思索したる最高の疑問であつたのであ
るが、釋尊の覺もやはりこの大問題に對して永い間
研究し思索し體驗せられたその最後の結晶に他なら
なかつたことは當然である。しかし釋尊の思索と體
験とは、唯だ一つの點に於て他の宗教家のそれと全
く異なつてゐた。即ちそれは釋尊があくまで現實
を重視し眞理を尊重せられたことであつて、涅槃問
題の解決に際しても絶對に不合理なことを許容し給
はなかつたのである。

眞理の要求とは

然らばその眞理とは何であるか。世の中に於て日
夜に轉變する所謂無常遷滅の事柄と、永遠に生ずる
こともなく滅することもなき所謂常住實在の事柄と

假に成立すること、なつた所謂有爲の法であるか
らである。これを佛教では「諸行無常」といふ。有
爲は無常なりといふことである。次に世の中は何故
に自分の思ふ様にならぬのであるか。それは思ふ様
になるものと考へる方が間違つてゐるのである。何
となれば、一切は多數の原因の集合よりして起る事
柄である。一つの原因が一切を創造し支配するとい
ふ様なことはない。常に一切を宰つてゐる所の唯一
の主人公(常一主宰)としての「我」なるものは存
在しない。即ち無我といふことは唯一の主宰者又は
支配者がないといふことである。世の中は大勢の力
によつて動く。自分ばかりの勝手に出来るものでは
無い。我儘を通さんとするそこに苦痛がある。調和
の道は即ち安樂への道である。これが即ち佛教の教
へる「諸法無我」の教義である。

寂滅涅槃

従つて無常と無我との現實界を去つて常樂我淨の
涅槃に到達せんとするには、諸行をして無常たらし
め諸法をして無我たらしめる根本原因を取去らねば
ならない。この根本原因を取去るといふことは、現

實世界からその根本的な原理を抜き去ることに他ならない。現實界の一切は因縁の集合より生ずる、因縁の集合によらざる何物もなしとすれば、吾等の要求する常樂我淨の世界はこの因縁生起の世界である所の現實界の根本原則の否定の中に求められねばならない。この現實の制約の徹底的否定——その否定せらるべき制約が何者であるかは後に述べることにして——この否定の後に残されるものは何であるか。そこには過去もなく現在もなく、有もなく無もなく、彼もなく此もなく、生もなく死もなく、往もなく來もなく、又心身の區別もない。かくの如き一切の區別を取去つた湛然たる無爲の有様を形容して寂滅といふ。従つて、問題の最後の結論は涅槃は寂滅なりといふことに他ならない。寂滅といふことは決して虚無といふことではない。否、現實の一切を拘束してゐる時間上の前後とか、彼とか此とか、生とか滅とか、往とか來とか、一とか異とか、凡て吾々の言葉や思惟にあらはれる一切の制約を脱出してゐることに他ならない。如來の身は外形より見れば丈六の姿を具へ給へる生滅の肉身であらせられる

が、その内面に於ては決してかくの如き有限の肉體に束縛せられたるものではない。如來は生死無常の根源となるべき一切の原因を根本的に打破つて、超肉體的な超現世的な常住不滅の絶対無限の大いなる境涯に到達して居られるのである。この點に於て阿含經の教へる所と法華經の教へる所との間に少しも差異がないのであつて、唯だ異なる點は後者が理論上この本體を完全に舒述することを得てゐるといふ一點に過ぎないのである。

五蘊について

さて、それならば吾等のこの現實界を制約する根本的な原則といふのは何であるか。阿含經に於てはこの制約を五蘊といふ言葉で説いてゐる。(この點、大乘經が單に無明といふことをいつて、現實の根本制約の脱却について餘り詳しく論じないのに比し、寧ろ勝れてゐる點であらうと思ふ。)五蘊とは、申すまでもなく「色、受、想、行、識」の五つのことであるが、色とは物質的現象の全部をいふもので、即ち外界の事物が吾等に授ける種々の經驗内容であり、受とはこれを心が感受して苦樂等の感興を

受せられ、想せられ、行せられ、識せられる所の、換言すれば心のはたらきによつて現實として構成せられる所の色であつて、決して單に外界から來る孤立的なるものではない。従つて「佛は色を滅せり」などいふ場合にも單に色のみを滅して居るのではなく、今の如き關係にある所の色、即ち五蘊そのものを滅してゐることをいふのである。行を滅するとか識を滅するとかいふ場合も同様である。而もこの五蘊の中に於て最も根本的なものは「色」と「受」との關係であつて、この關係によつて吾々の心は、單に外から次々に無秩序に斷片的に往來し接觸し來る種々の經驗内容を受取つて之に對して苦樂の情を起す所の——平たくいへば、昨日はか様なことがあつて嬉しかつたとか、今日はこんなことで悲しかつたとかいふ様に、その時々々の出來事に心を奪はれてゐる様な——純然たる他律的の無力な存在となつてしまつてゐるのである。従つて、五蘊を滅して寂滅の境涯に入ることとは、何よりも先づこの經驗の受動性——これが無我の根本原因となる——と利那的生住異滅の變易性——これが無常の根本原因となる——

起すこと、想とはそれが吾々の心の中に表象を作り印象を残すはたらき、行とはそれが時間の上に配列せられて客觀的現象としての意味を得ること、識とはそれについて種々の分別判斷をなし、赤とか青とか、彼とか此とか、是とか非とかいふ様な種々の區別を知ることである。この五蘊のはたらきによつて所謂客觀的現實なるものが成立すると共に、この五つのはたらきの綜合が即ち吾々の現象的な心なのである。心といつても心といふ特別のものがあるわけではない。心は五蘊の綜合であり、五蘊の和合によつて成立つものが所謂客觀的現實界(自然界)に他ならない。即ち現實は「色」によつて内容的のものとなり、「受」によつて心に接觸し心に苦樂の情を起さしむるものとなり、「想」によつて心に對し對象的なものとなり、「行」によつて時間上に配列された客觀的なものとなり、「識」によつて種々の判斷の對象としての差別的なものとなる。(而して、この五つのはたらきは双關的のものであつて、他の四つを離れては何れの一つも成立することが出來ないのである。今は便宜上色を最初に述べたが、その色は即ち、

受せられ、想せられ、行せられ、識せられる所の、換言すれば心のはたらきによつて現實として構成せられる所の色であつて、決して單に外界から來る孤立的なるものではない。従つて「佛は色を滅せり」などいふ場合にも單に色のみを滅して居るのではなく、今の如き關係にある所の色、即ち五蘊そのものを滅してゐることをいふのである。行を滅するとか識を滅するとかいふ場合も同様である。而もこの五蘊の中に於て最も根本的なものは「色」と「受」との關係であつて、この關係によつて吾々の心は、單に外から次々に無秩序に斷片的に往來し接觸し來る種々の經驗内容を受取つて之に對して苦樂の情を起す所の——平たくいへば、昨日はか様なことがあつて嬉しかつたとか、今日はこんなことで悲しかつたとかいふ様に、その時々々の出來事に心を奪はれてゐる様な——純然たる他律的の無力な存在となつてしまつてゐるのである。従つて、五蘊を滅して寂滅の境涯に入ることとは、何よりも先づこの經驗の受動性——これが無我の根本原因となる——と利那的生住異滅の變易性——これが無常の根本原因となる——

——を克服することにあらねばならぬ。而も之に伴つて想、行、識に基く、經驗の對象性（即ち事物は吾々の前にあつて吾々の心にうつるものであるといふこと）、自然の客觀性（即ち自然は吾々の外にあつて吾々にはたらきかけるものであるといふこと）、並に判斷にあらはれたる各種の差別も滅び去るが故に、そこには客觀的事物に屬するものとしての、生もなく滅もなく、過去もなく未來もなく、彼もなく此もなく、同もなく異もない。如來の境涯は眞に寂滅であり、清淨であり、事物によつて微動も受ける金剛不壞の妙色心に他ならないのである。

釋尊の體驗

以上の事柄が單にかくあらねばならぬといふ理論上の斷定に過ぎぬとすれば、それは、宗教の立場からいへば、何等の價值もなき空想といはねばならないであらう。否、寂滅とは決して單なる理想ではなくして、實に釋尊が永い間の修行によつて、現實に體得し享受し給へる一個の切なる精神的境地に他ならなかつたのである。釋尊は決して外界の一切の事象を單に外より來り又忽ちにして去り行く所の刹那

的、受動的、客觀的なものとして經驗して居られたものではなかつた。釋尊にとつては一切の事柄は御自身の心の底知れぬ深みより渾々と流れ出づる生命そのもの、進りとして、永遠不滅の根柢の上に立ちつゝ、而も次から次へと生起する四季のうつろひの如きものに感ぜられたであらう。生といふことも死といふことも自己の生命の無限の流の上に立つ一種の泡沫の如きものに過ぎなかつたであらう。何物と雖も突如外界より來つて釋尊の御心を驚かし惱まし奉る如きことはなかつた。一切は釋尊にとつては主觀的であり、能動的であり、自主的であつた。かくの如くして、實に、釋尊の生命そのものが眞の寂滅に他ならなかつた。而して、その實際の有様は阿含の經々にあらはれたる佛陀の言動によつて明かである。弟子達は釋尊の丈六の色身を拜しつゝ、決してその色身に束縛せられた有限の釋尊を思ふことはなかつた。五蘊の色心にありつゝ、而も完全に五蘊を滅却したる超人間的なる人間として拜し奉つたのであつた。あの釋尊の愜なき姿、あの釋尊の欲望に捕はれざる心、あの釋尊の全宇宙に溢ちたる様な大慈大悲

の温容を拜するもの、如何にして釋尊が五蘊を完全に滅して寂滅の絶對境にありといふことを確信せず居られるであらうか。殊に、現實に釋尊を拜し奉りつゝあつた當時の弟子達にとつては、釋尊の人格が全宇宙に遍滿する宏大無邊のものであるといふ大乘的な教——そのことは彼等にとつては餘りに自然であり寧ろ平凡すぎるごからであつた——よりも、寧ろこの釋尊の丈六の色身そのまゝが五蘊の人間のなる束縛を脱したる寂滅そのものであるといつた方が、却つて深刻に釋尊の偉大を知り、實際的にその菩提心を刺戟せられたといふことは、想像するに難くない所であらう。それ故に吾等は寂滅といふ言葉の消極的なるに惑はざるゝことなく、寧ろ五蘊の受傷的形式を滅するといふ阿含の無餘涅槃の思想の中に如何に大乘的にして積極的なる内容が盛られてゐるかといふことを、深く考へねばならぬのである。之を要するに、色受想行識の客觀的形式は一見この現實界を根本的に制約する絶對不動のものゝ如くに見ゆるけれども、實は自分の心の不完全なる體驗が客觀界にかゝる制約を與へてゐるのであつて、

偉哉佛の覺!

外界の事情に一切惱まされず精神の絶對的安定を得てゐるといへば、それは一見左程むづかしくもないことのように思はれるが、事實釋尊の正體が決してその様な簡單なものでなかつたといふことは、この體驗を前記の理論に照して見るとき、畧ぼその有様が窺はれるであらう。釋尊の覺はそれによつて、現實界の全體を支配する根本法則をも徹底的に打破る程のものであつた。即ち釋尊以外は一切の人の體驗によれば、現實は結局時間といふ拔差ならぬ形式の上種々の法則に従つて生起する客觀的なるものとして考へられてゐる。釋尊と共にこの考を打破つたかに見えるカントの先驗哲學にしても、今尙感覺の所與性といふ問題に對して最後の解決を得てゐない。従つて、時間の先天性といふことも後に於ては最後の桎梏となつてゐる。ひとり釋尊の正覺に於てのみ、色と受との關係を根本的に打破つて、絶對的の自

主性を得てゐるのである。だが、これは釋尊一人の正覺である。一切の人間がこの境界に止まつてゐるのに釋尊一人の正覺によつてこの一切を無明と斷定して、人間の心の奥底にある佛性を開顯し、更に之によつて現實そのもの、意味と之を支配する法則とを根本的に轉換せんとするのであるから、釋尊の覺の如何に強烈なものであつたか、之によつて知られるのであらう。事實、佛滅後三千年間の高僧の中にも、實際にこれ程強烈な覺を得て居られた弟子は先づなかつたと斷定しても過言ではあるまい。

(次續)

善智識は大因縁

波 浪 子

ある時に お釋迦様は王舎城の耆婆が所有してゐる庵室、羅樹園に在りましたことがございました。同じ日に摩訶陀國の王様で、惡逆無道で有名な、かの韋

提希夫人の子であるところの阿闍世は、數多の大臣共にとり繞れて、王宮の高樓にゐました。時は宛かも四月の十五日、満月の夜でありました、晴れた月夜、當にこれから雨期に入らうとする前、新緑を照らす麗かな月明き夜に、人々は歡びのうたを楽しく謳つたのであります。

やがて阿闍世王は申しました、
「今夜はどの沙門婆羅門を訪ねやうか、誰れが自分の情を満足せしめるであらうか」

夫は毎月十五日と三十日は、坊さん達が相會つて正直に犯した罪を大勢に告白する懺悔の日でありますから、王様も可然教家の化導を欲したのであります。所謂それは善心の靈發であります。

即座に一りの大臣は申し上たのであります、
「王様よ、富蘭那迦葉は教團の指導者として老熟な方ですから、彼の人をお訪ね遊ばして、平和の道

をお聞きになりましては？」

併し 王様は何のお返事もありません。かやうにして五人の大臣は次ぎからつぎへと未伽梨瞿舍利、阿耆多翅舍欽婆羅、散若夷毗羅梨沸、尼毘子等の五師を勧めました。王様は矢張り黙然として何のお挨拶もありませんでした。

深い沈黙から 王様は靜かに傍近くゐますお氣にいらの侍醫である耆婆に向はれて、
「お前は何故に一言も發せないのか」
とお訊ねになりました。

爾の時に耆婆は徐ろに申上げました、
「お釋迦様は千二百五十人のお弟子と共に、只今私の羅樹園庵室にお在します、お釋迦様こそ最も傑出した尊上無二の大法王にまします、どうか只今より御佛の所にお詣り遊ばして然るべしと存じます」

かやうにお勧め致しますと、 王様は

「然らば直ぐに白象の用意をせよ」

と、やがて 王様は耆婆の案内で、五百の官女と俱に、南簿肅々として羅樹園に向はれました。

庵室が眼前に迫つた時に、王様は何物にか變はれた姿で突然大象を止めまして、顔色も見る／＼變りました。而して興奮して申さるには、

「耆婆よ、お前は私を欺しはしないか、私を冤家に渡すのではないか、先程お前は 佛陀が千二百五十人と共に庵室に居られると申したが、さういふ大勢のお弟子達が居られるのに、かうして何等の聲も聞えず、咳一つせぬのは不思議ではないか」
言下に耆婆はお答へ致しました、
「王様よ、決して御心配はありません、私は陛下を欺して敵にわたすものではありません、どうか御安心してお進み下さい、もう直ぐ内部が見えますから」

王様は半信半疑で進まれたが一步は一步より安堵

の胸を撫でおろされました。やがて大象から下りて講堂に近づかれました。

「者婆よ、世尊は何處に在ますのであるか」

「王様よ、あの真中の柱の傍に東面して坐り、御弟子達に圍まれて在るのが、御佛様であります」

王様は一禮して講堂に昇がられ、恭しく一隅にお立ちになり。澄んだ湖水のやうに静かに端坐てゐられる大衆を見廻はして、覺えずかう呼び出されました。

「お、御弟子達の静肅さよ、我が子のウダーイブハツダーもこんな風に静肅であつたらばナア」

それを耳にされた 釋迦牟尼佛は

「王よ、あなたはあなたの愛する者に思ひ遣らるゝのであるか」

「世尊よ、私は子を愛します、それで私はウダーイブハツダーが、このお弟子達の持つて居る静けさを持つてゐたらばと思ふのであります」

「婆羅門から聞いたことを話すことが出来ますか」

「世尊よ、それは出来ません」
「であるならば、一往彼等の説明をお話し下さい、たとひそれはあなたの心に應はない話であつても」

「それは差支ありません、世尊よ、私は曾て富蘭那迦葉の所へ参りました、其他の五師の處へも参りました。併しその何れの説にも満足することが出来ないので、只今かうして 世尊にお尋ね申上ぐるのでございます」

「王よ、私は極めて適切に答へませう、譬ばこゝに宮廷の人々の中に一人の奴隷があつて、あなたに仕へ、朝は早く起き夜は遅く寝ね、あなたに満足を與へるやうに働き、あなたの爲すこと云ふことに背かないやうに氣遣ひ、始終あなたの顔色を伺つてゐるとします。然るにその奴隷はこんなことを考へます。功德の果報は何といふ奇特不可思議

王様は合掌して 世尊を禮拜してかく申上げ、やがて御弟子達に一禮して坐りました。そして目に世尊を瞻仰して、恭しく申します。

「世尊よ、若し御許し下さるならば、或る事に就てお尋ねいたしたいのでございますが」

「王よ、何なりとも御問ひなさるがよろしい」

「世尊よ、此世には種々の職業があります、それは象師、騎手、御者、弓術師、旗手、士官、兵糧方、戰士、奴隷、料理人、理髮師、湯番、花屋、洗濯人、職工、簿記者、等々種々あります。而して此等の職業は現に此の世界に於て目に見える報酬を得て、彼自身と両親と女と子とを幸福にし満足させて居ります。又沙門や婆羅門に對して好き報即ち天上界に生るべき天上界の果報を得べき布施を致します。このやうに沙門に就いても現實の報のあることをお説き下さるでしようか」

「王よ、あなたは此の問題に就て、曾て他の沙門や

なものであらうか、我大王も人であり、私も亦人である、而も大王は充分五欲の樂を受けて、恰度神様のやうに楽しく暮し、私は奴隷として王様に仕へ、始終氣ばかり遣つて居る。私はこれから更に大功徳を積まう、それには鬚髪をおろし、黄衣を着けて出家とならうと考へ遂に出家して修行をします。それを人が、あなたに告げます、「陛下の奴隷が出家して修行をして居ります、」それを聞いて、あなたは「今一度奴隷にせよ」と、かう申されますか」

「世尊よ、さうは申しませぬ、私は尊敬して座を起つて彼を迎へ、座に即かしめ、衣食住薬等の用具の供養し、法の如く彼を好遇いたすのであります」

「王よ、何と考へられますか、之は沙門が此世に於て現に受くる所の果報ではありませぬか」
「いかにも左様でございます」

「王よ、是が沙門の現果の第一であります」

「世尊よ、この外にもありますか」

「あります。茲に農業をして税を拂ひ、王の富を増してゐる家主が、前の奴隷のやうに出家するごし
ます、之も前と同様にお領解が出来ませう」

「かういふ事よりか、もつと勝れた、もつと善い沙
門の現果をお説き願えませぬか」

「王よ、説きませう、諷かに聽いて善く味つて下さ
い、

- 一、如來の出現、説法
- 二、聽衆の歸依、出家
- 三、戒律を持つ
- 四、官能を守る
- 五、正念に住する
- 六、足ることを知る
- 七、五蓋（貪欲、瞋恚、睡眠、掉悔、疑の覆）
を捨てる

制すべきことを領受して下さるやうにお願ひ致し
ます」

「いかにも、あなたは罪に敗けました。併しあなた
が罪を罪と見て教に依つて悔ひ改めるならば、あ
なたは再生した清らかな人となるでございませう、
王よ、罪を罪と見て法に依つて悔ひ改め、以後そ
の抑制にはいるならば、聖者の律に於ける常法で
あります」

「世尊よ、洵に有難うございませう安心をいたしまし
た私は用事の多い身でありますから、今日はこれ
でお暇をお願ひ申上ます」

「王よ、どうぞいゝやうに」
斯して惡逆の王であつた阿闍世は、晴々しく心も
身も爽やかに成つて歡び勇んで、宮殿へ歸つて行き
ました。

「善智識は是れ大因縁なり、所謂化導して、佛を見、
阿耨多羅三藐三菩提の心を發すことを得せしむ」と、

八、四禪を修める

九、五取蘊（有漏の五蘊）の無常を感ずる

十、變化作用を學ぶ

十一、神足通を學ぶ

十二、天耳通を學ぶ

十三、他心通を學ぶ

十四、宿命通を學ぶ

十五、天眼通を學ぶ

十六、漏盡通を學ぶ

王よ、此等が勝れた沙門の現果である」

その時に、王は 世尊の教を聞いて深く感激し
て、佛陀に歸し、法に歸し在家の信徒であることを
請ふたのであります、そして申しました。

「世尊よ、罪は私を打ち敗かしました。私は愚鈍愚
惡な奴でありました、私は國王になるが爲めに、
正法の人、正法の王であつた 私の父を殺しまし
た。どうか私の罪を罪として、將來私が自らを

法華經に説かれて居ります通り、阿闍世太子が、惡
智識提婆達多等に誘惑せられて、父の頻婆沙羅王を
獄の中へ投じて餓死せしめ、母の韋提希夫人を七重
の室に幽閉して苦しめたこともありましたが、幸に
も耆婆に導かれて、遂に一大善縁を與へられたが爲
めに 釋迦牟尼世尊を見上り、忽ち心伏隨順して已
來、佛滅後には第一の經典結集の大善事も成し遂げ
たことを思ふ時に、私共は一種の強い力に引かされ
ます。今迄は善人であるとか、正直者と稱えられて
居た人でも一朝にして恐るべき罪惡を犯す者もあれ
ば、阿闍世王の如きもあります。十界互具一念三千
の妙理は眼前の事實であります、お互に今の一念を
ば正しく強く菩薩行へと進みたいものであります。
南無妙法蓮華經

記 事

見聞録

日蓮宗徒の新結社

宗教改革のため新しい結社を作るべく、かねて準備を進めて居た横浜市内の日蓮宗のある布教師、及び一部の檀徒は約三百の同志を集めて、「解放躍進同盟」が現はれんとする模様で結成後は社民脱退派の國家社會黨準備會に加はることになつて居るとか。凡そ聖祖の流れを拘むものは、高い理想を以て世間に光明を與へ、人を救ふものでありたい。

新興佛教を聞く

五月五日さる會場で、新興佛教團の公開講演があつた。一昨年七月迄は西本願寺の布教師であつた木村氏曰く「眞宗にしる日蓮宗にしる其等の教理内容から大衆に満足と與へるやうなそれ程のものがあるか、彼等は唯資本主義を擁護する立場をやつてゐるのみ。宗教の目的は大衆の解放にある、單なる一部特權者の擁護ではない、平等に解放することである。我等大衆は金融資本團を倒さねば自由にならぬ、この資本團を打倒することに全力を注ぐ、これ

でも、又赤穂義士の寺坂對大石の如き皆經濟問題を離れてはない。現に物質が坊主の支配をしてゐるではないか、自分がパンを信者から得て、金次第で待遇を異にし乍ら、大衆に精神生活を強ゆることは都合である。——佛教精神こそは私有否定である。と、力説された。

妹尾氏程の人が、一時の方便とは云へ、時をば宗教の本質の側に迄及ばされた事は不思議に思ふ。時の大切は其の民衆化導の方面に對しての事は論ずる迄もないが、眞理が時に從つて變化するやうでは眞理とは云へない、永久不變の處に法の尊嚴はある。妙法は西洋式の法規のみを指すのではない、又單なる教法のみでもない。日蓮聖人は報恩抄に於て有名な「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華經は萬年の外未來までもながるべし」と其他「妙法蓮華經の五字は經文にあらず其義にあらず唯一部の意のみ」或は「法華經の心なり體なり所詮なり」、或は「十界の依正即ち妙法蓮華經の當體なり」等々祖判に示されてゐることは充分御周知の筈、妙法を捨て、自己の存在はない位のことはお忘れになつてゐない事と推察し

に依つてのみ意義があると思ふ」と熱辯を振はれた。

眞宗の教義と日蓮宗の教義を同一列に早呑込みをした處に氏の根本認見があるであらう。又大衆の解放が、佛教の全部の目的と思ふやうでは未だ幼稚園である。

資本團を打倒して意義あるとは所謂破壊論で、其建設や理想實現を説かないのはマルクス一流の戯論に過ぎない。

次に妹尾氏は「日蓮聖人は時を論せられた、時程大きな影響を與へるものはないと、卯や筍の例を引いて、今日は最早六百年前に唱へた南無妙法蓮華經の題目は是を絶對として居る必要は更でない、自分が南無妙法蓮華經を捨てねばならぬことは、日蓮聖人の慈悲からで、現代の宗教なるが故であることを高調し、題目を唱へて病氣が癒るやうならば、聖祖は四條金吾を煩せて其業は用ゐられない筈ではないか。吾々は現實を忘れては何もない、吾々は只精神が救はれる——といふことが、矛盾を感ずると、それより弘法大師でも、日蓮聖人でも、封建時代の武士

で、世間で近頃妹尾氏が題目を捨てたといふやうな噂を耳にしても、それは何かの方便と思つてゐたが、直接に聞いて洵に不思議に思つた。又經濟第一義に推されて佛經は私有否定論も實に情ない。御承知の阿含經に「現法安」の四具足中の守護具足は何を教へられたものか、又佛教の菩薩行の第一が布施にあることは大に注意を要すること、私有なければ布施の用はない、布施の行に最も力説遊ばした釋尊の御意こそ、富貴者、權力家の打倒に非らずして慈悲報恩の淨化生活に向はしめられ、四姓の其分に應じて援け合ひ、光明平和の理想境に安住せしめられてゐたことが想像される。佛教は鬭争を好まない、佛教は破壊でも排斥でもない、即ち開顯統一である。

日生上人が昨春、妹尾氏が甲州から葡萄のお菓子を送られたのを手にし乍ら、「ア、彼れも先年一度會見して領解したやうに申して歸つたが、矢張りさうでもなかつたのか、あの儘に打捨て、も置かれまいと思ふが、未だ時機でないから、モウ少し見てゐて其の内に話して遣りたいものだ」と、仰せられた。只今 日生上人の御存生なれば必ずや一度來るやうに

どの、お手紙なり使は發せられた事と信する。嗟：
 ……
 純信な情緒纏綿の妹尾氏こそ、どうかあの涙ぐましい「光を慕ひて」の著述時代の氣分に歸つて頂きたい。自分は妹尾氏とは僅かに二三回の面識ではあるが、恩師のお意のある處を思ひ、今又大法の爲め、御國の爲めに念慮する時に、今日の氏の所説の甚しい脱線ぶりは、釋尊や日蓮聖人の聖意に悖ることを大に悲しむ者である、又恩師日生上人は如何に思召されてゐるであらうかに到つては、斷腸の感嘆深い。……

どうしても時なるが故にこの氏の所説が翻されねば已むを得ぬ、潔く佛教の榮冠を捨て、一路堂々と社會共產主義者としてお進み下さいと申上げる。

(磯部生)

大惡より大善興る歟

一併優に國人が熱狂せる時に、一大不祥事件が勃發した。曰く大養首相狙撃等の不穩事件である。當局當時の發表には「帝國國內の現狀に憤激し非常手段に訴へ今次の不祥事件を惹起したる一味に關與せる

陸軍側人員は陸軍士官學校在學中の士官候補生十一名又海軍側人員は海軍中少尉六名にして内一名は豫備役に在るものなり、事件後直に全員東京憲兵隊に自首したるを以て目下同隊に收容取調中なり」とあつた。
 眞に國を愛する者、身命を賭して國を護る者は、軍人と宗教家である。而かも既成政黨の弊惡なるが如く、宗教家に於ても頽廢し切つてゐる、志ある者誰れか發憤せざらんやである。青春の感激に走り易い熱血時代には、一步踏み止まることが出來難い、實に危険千萬で、そこに修養を要するのである。
 今回の事件は他と異つて立派な陸海軍將校といふことに、内外を論せず重大視するのである。紐育タイムス紙は早速、「これは日本政府の外交政策に對する憤怒から起つたものである、それは全世界を驚かせるであらう、そして同時に日本の國民及び政府に對して新しい緊張と重大なる責任を課するであらう」を云云してゐる。
 社會の構成に就ては殆んど淺識の人々の一舉一動も、それが世界への大きな波紋をなすことを凝視す

る時に、いかに國民教化が大切であり、我統一團本來の使命の重要かゞ視はれる。いくら誠意を以て正直者として一命を投げ出してやつた仕事でも、それが正見でない場合は大死よりも劣る結果となる。茲に正しき宗教の必要はある、寔に正しい宗教の信仰こそ一切の根本となる。明治大帝の軍人五ヶ條も一

誠を以て之を貫くべく、「一の誠心こそ大切なれ」と宣へる誠心の開拓は、正しい信仰の力なるを思ふ時に、この國家益々多事、國民舉措を失はんとする際、法華一乘の大白法に因て泰然其の嚮ふ處を指示された日蓮聖人の御教こそ、自他の倍々鑽仰を深からしむる所ではあるまいか。

教報

統一團本部活動

不順時な天候も愈五月の聲に爛熱の春宵、都人士は徒ら歩きの期節となつた。而かも五月一日は日曜でもありメーデーに相當する、吾等日蓮教徒として本多上人の流を拘む者何ぞして安適に過されやうぞ！

往年本多上人湘南に御静養中、ある宣教師が街頭に聲を擧げて聖の子よと叫んで居るのを聽いてお歸りになつて後、七百年前日蓮大聖人は辻説法を始められて已來、門下は之に順すべきであるにも不拘、今や道路布教は基督教徒や救世軍の獨占の如き觀あることは大に慨すべし、宜しく模範的な街頭傳道を致さう

でないかと御病軀を押して秋宵冷氣をあびつゝ都大路の中央にお立ちになつて、大師子吼を遊ばし教界の隔阂を破られた。日生魁したり若黨共二陣三陣續けよかし』の無言の響は吾等の耳朶を強く々々うつつた。殿堂より街頭へ！ 然り街頭への進出！
 此日午後七時、報恩園より大芝懸旗と宣傳旗數旗を清風に靡かせつ、二列隊隊の一行メカホンの叫びも雄々數、目的の場所淺草竹町に陣取つた。

日曜日はあり、一日ではあり、程かな天候に散歩の數十百の男女は、何んなことをいふのかと好奇心に午ばかられつ周圍を繞つた。先づ知法恩園の歌と題目三唱に始まり、田中道爾氏は直ちに開會を宣し、續いて河合陸明氏は日蓮聖人の勳王を説き、次に中村清

一氏は現代危急の場合に果して如何に善處せんかの金鑰を與へ、次に磯部派事氏は難局匡救の根本策を論じた。聽衆は刻々に加はり所謂十重廿重の重圍となつた。折も折拘換の被害二三あれば中止を要する旨、查公の注意にこれは〴〵と、同志は極力警戒を嚴にし、今暫くと小西日喜師は日蓮聖人の人格を語り、最後に和賀義見師は立正安國を力説して惜しくも閉會に入つた。

これより後に別動隊は二、三町離れたる辻に出で、日暮光道師開會を宣し、續いて田中道爾氏、梶引弘氏、山口智光師、梶木顯正師等各熱辯を振ひ大衆に法雨を降らし共に閉會したのは十時に近かつた。
 當夜は和賀謙介氏、添田吉美氏、添田悦太

鄭氏、川西、馬田、安江、齊藤等の多数の清
援者あつて、日生上人の學風、法統の顯揚に
十二分の奉仕されたのは、實きこと限りなく
嬉しい、猶數百枚の印刷物を施すことの出来
たのも何等かの縁となるであらう。

五月十六日、第一、第三の日曜日の夜分宣傳
といふことであつたが、周圍の事情を考慮し
て當分は十六日は、日生上人の御命日である
からこれを中心に毎月六の日に天候の許す限
り街頭に立つことに協定して、今晚も竹町に
運出した。

報恩閣より竹町へは恰度よい示威行進で、
途行く人々は注目する、面かも昨夕の大凶
變に一層私兵は市民に警鐘を撃たればなら
ぬ。日生上人在せば又良い御勸業をお示し下
さるべきであらうが、今の場合我等は小節に
拘泥すべきでない、門下協力全能を發揮すべ
きと思ふ、其の先祥を純本多上人の學系が示
すことに大きな意義と誇りを有する。

前例によつて知法恩國の歌と題目三唱に人
々は集る々々、直ちに田中道爾氏立つて世界
の大勢と我國の現状を、極めてきわどい所迄
突き進んで聽衆の手に汗を握らした。續い
て藤部藩士氏は吾等は立正安國の宗教運動、

演は、蓋し最も適切なる時機を得たるもの
で、特に學生乃至一般青年諸氏の來聴を歓迎
する由。

尙同會の毎月二十八日例會は報恩館内にし
て之が事務は同館門前村石梅太郎方にて取
扱ふ由。(七、四、六、演松新聞報)

福島 教信

三月一日午前六時五十九分二本松驛通過にて
東京衛戍病院に入院中の在仙部隊瀧澤事變傷
病兵十七名仙臺衛戍病院に轉院するを見送り
しぬ。

三月一日動員令にて召集せられたる兵士を二
本松驛に歡送す。
三月六日午前九時より日支事變戦病死英靈大
追悼會を舉行す。

三月六日午後二時二十一分二本松驛通過にて
去る二月四日五日の兩日のヘルビンの教義に
て名譽の戦死せる第二師團左衛門隊並に上
海にて戦死せる海軍兵等廿五基仙臺に行けり
四つて見送禮經す。

三月七日午後四時三十分二本松驛着にて二本
松町出身吉野孫吉氏外二名の遺骨到着す四つ
て出送禮經す。

それは法華經の大善を人人に國家に世界に勸
めんとするものであると淨化運動を遂べ、大
に中村清一氏は人間に信仰を有たればならぬ
その信仰は正しからざるべからざる所以に就
て接々數千言、聽衆は一人より一人と増加し
た。次に山口智光師は明治大帝の御製や日蓮
聖人の聖訓に基いて現代殊に刻下の世相には
特に宗祖唱導の立正安國の運動が緊要なるか
を力説し、晩春の夜風冷きにも物らず二百に
近い大衆に強い感激を興へた。時は當に十時
に迫らんとしてゐるので田中氏主唱の下に一
同、陛下の萬歳を和唱して歡會としたが、聽
衆は依然として去るもの稀に見るのみ、私共
はある一種の力強い感に觸れた。

演松 教誌

演松日蓮聖師會では、今より七年前に日本樂
器社内の有志に依つて生れ出でた一修養團體
に過ぎなかつたが、創立してから見付町女妙
寺山本老僧正の當任講師として、熱烈なる指
導懇切な精進向上の努力を以て、社外一

三月八日午前九時五十二分二本松驛通過にて
若松部隊の戦死者五名の遺骨各々の出身地に
向つた四つて出迎ひ禮經す。

三月九日午後一時二本松町出身歩兵上等兵吉
野孫吉氏の葬式に參列弔辭を呈す。

三月九日午後二時安達郡下川崎村出身歩兵伍
長野地進氏の葬式に弔辭を呈す。

三月十一日午後一時安達郡新川村出身歩兵軍
曹安齋盛彌氏の葬式に弔電を呈す。

三月十三日午前六時五十九分二本松驛通過に
て去る二月二十日上海事件の戦闘にて戦死せ
る宮城縣出身海軍三等兵曹但馬新治、岡小野
寺英夫兩氏の遺骨行けり四つて見送禮經す。

三月十八日午前八時五十九分二本松驛通過に
て仙臺部隊傷病兵十一名仙臺衛戍病院に轉院
するを見送りしぬ。

三月十八日夜蓮華寺に於て題目講を修行す。
三月廿一日午前十一時五十九分二本松驛通過
にて伊達郡出身高田獨立山砲兵隊隊後備上等
兵佐藤吉六氏病死の遺骨行けり四つて見送り
禮經す。

三月廿一日午後蓮華寺に於て涅槃會を修行
す。
三月二十三日午前十一時二十四分二本松驛通

般の同志も陸續として入會するもの多く、演
松市に於ける日蓮門下の集團として、稀に見
る極めて高遠の理想を以て組織せらるゝ實實
剛健のもので、毎月二十八日午後六時より市
内元町報恩館に於て、例會開催の啓で、由
來演松市における日蓮教徒の或る部類は、今
以て因襲の久しき退嬰的惰性に依り、恰も睡
眠をむさぼりつゝあるものゝ如く、就中甚だ
しきは新舊祝祭を專一に愚夫愚婦の迷信を助
長せしめ、其間怪變感指笑を招くが如きは、
抑も絶大非凡の日蓮大聖人の人格を傷つくる
の恐れあるものならんと、志あるものゝ常に
憂慮慨嘆に堪へない處で、今回個體で近代の
傑僧本多日生師の生氣發射たる統制にありし
願本法華宗管長赤井村日成殿下が、監督布教師
松本日公師、其他さう／＼たる隨員と共に、
本月六日午後六時より右報恩館に於て、時局
の「日蓮主義」の題下で大講演會を開催する事
となつた。

現下此種の儘しは獨り迷信打破の覺醒劑たる
而已ならず、最近世間の耳目を聳動しつゝあ
る左傾右傾の紛々たる動搖思想の爲めに、可
惜青年の前途を誤るもの類々たる折柄、確知
として皇室中心を目的とする日本國民道の講
演にて歩兵第四師團初年兵五百三十餘名渡瀧
せり四つて歡送す。

三月二十四日午前十一時二十四分二本松驛通
過にて騎兵第二聯隊、工兵第二大隊、野砲兵
第二聯隊の特科隊合計三百餘名渡瀧せり四つ
て歡送す。

四月五日午後一時五十七分二本松驛通過にて
山形縣隊戦死者四基の遺骨歸る四つて停車場
に見送り禮經す。

四月十日午後四時三十分二本松驛通過にて仙
臺部隊傷病兵四名仙臺衛戍病院に轉院に就き
停車場に見送りしぬ。

四月十五日貧困者救濟事業の爲め托鉢願行。
四月十七日夜於蓮華寺題目講修行。

四月廿七日免因保護事業の爲め托鉢願行。
四月廿八日午前十一時五十三分二本松驛通過に
て仙臺部隊七百三十三名の凱旋を歡送す。

國のため いのちをすてし ますらをの
たままつりける きやうのかなしき

團費誌料領收

自四月二十一日
至五月二十日

一金拾圓也	東京府	石川隆一殿	一金壹圓貳拾錢也	東京府	同野源吉殿
一金四圓五拾錢也	福山縣	柴田影祐殿	一金貳圓貳拾錢也	東京府	仙臺井上才吉殿
一金壹圓貳拾錢也	名古屋	清水一乘殿	一金壹圓四拾錢也	東京府	山田小高典吉殿
一金四拾圓也	大阪府	木村祥殿	一金參圓也	東京府	山口小高典吉殿
一金貳圓四拾錢也	東京府	大原行道殿	一金七拾五錢也	名古屋	石上愛子殿
一金壹圓貳拾錢也	東京府	福田敏夫殿	一金貳圓貳拾錢也	大阪府	小田未治郎殿
一金六拾錢也	大阪府	渡邊登代殿	一金貳圓貳拾錢也	東京府	大坂小田未治郎殿
一金四圓四拾錢也	東京府	和賀義見殿	一金貳圓也	青森縣	青森縣鈴木源八殿
一金六圓也	奈良縣	笠目善春殿	一金貳圓貳拾錢也	東京府	東京鈴木源八殿
一金貳圓四拾錢也	大阪府	小池芳雄殿	一金五拾錢也	同	東京鈴木源八殿
一金壹圓貳拾錢也	大阪府	古田慶三殿			菊地雄三殿
一金貳圓五拾錢也	大阪府	南卯之松殿			
一金壹圓也	青森縣	柏木吾市殿			
一金壹圓四拾五錢也	東京府	保井保五郎殿			
一金壹圓貳拾錢也	受知縣	中村新次郎殿			
一金參圓四拾錢也	臺南州	平川一彦殿			
一金貳圓貳拾錢也	東京府	島田惣五郎殿			
一金貳圓四拾錢也	千葉縣	木村日香殿			
一金參圓也	福井縣	増田大三郎殿			
一金貳圓貳拾錢也	北海道	林啓太郎殿			
一金六拾錢也	奈良縣	出口馬太郎殿			

一金壹圓貳拾錢也	東京府	同野源吉殿
一金貳圓貳拾錢也	仙臺	井上才吉殿
一金壹圓四拾錢也	東京府	吉田かつみ殿
一金參圓也	山口	小高典吉殿
一金七拾五錢也	名古屋	石上愛子殿
一金貳圓貳拾錢也	大阪府	小田未治郎殿
一金貳圓貳拾錢也	東京府	大坂小田未治郎殿
一金貳圓也	青森縣	青森縣鈴木源八殿
一金貳圓貳拾錢也	東京府	東京鈴木源八殿
一金五拾錢也	同	東京鈴木源八殿

「統一」會計

御注意

- 一、團費、誌料は總て前金に願ひます
- 一、「前金切」御注意致し二ヶ月に及ぶも御拂込なき場合は乍遺憾御送本見合はすことあります
- 一、集金郵便は參與以上にて其取立には團費誌料の上に金拾錢の集金料を添加致します
- 一、御轉居の節は必ず新舊双方を御明記御通知下さい

念告

本團は邦家の現状に鑑み當分左記の通り街頭布教を勵行可仕候に付團員諸氏は爲法國奮つて御奉仕相成度候

一、日時 毎月六日、十六日、廿六日、午後七時—九時

一、場所 淺草區竹町（三味線堀）

以上

統一團本部

追而雨天の時は中止

轉居

小生儀恩師本多日生上人の委囑を受け統一團協賛會理事長在任中去年八月九日洗足池畔清明文庫に於て開催したる同會發起人會に臨み議事を主宰せるが其閉會後即時腦出血を起し加療中の處佛天の加護に依り頃日全快致候得共病後靜養の爲め去る五月十二日（日蓮聖人身延入山記念の日）千葉縣市原郡濕津村（上總七里法華の片邊）に轉居致候

追て國家多事の折柄病後靜養中と雖も全く身を閑地に置くは甚だ遺憾の次第に付隔週上京洗足池畔洗足軒（藤海舟先生遺愛の家屋）に一週同滯留し財團法人清明會、財團法人立正會及關係會社（鐵道工業株式合資會社、土木興業株式會社）の事務を處理可致候

右道友諸君に謹告仕候
昭和七年六月一日

千葉縣市原郡濕津村大作二百一番地
宮原六郎

本多日生上人名著在庫品特價提供

一聖語錄 改版 特價 金壹圓八拾錢 送料共

一日蓮主義本領 全 金貳圓拾錢

一法華經要義 全 金貳圓五拾錢

一日蓮主義心髓 全 金壹圓五拾錢

一日蓮主義精要 全 金貳圓九拾錢

磯部滿事謹輯 一本多日生上人 特價 金壹圓七拾錢 送料共

申込所 東京市外南品川妙國寺境内 「統一」發行所 振替東京五一〇七一番

一月「教」誌 定價一冊 金拾錢 送料共 金五厘 一ヶ年前金 金壹圓貳拾錢 送料共

申込所 東京市外南品川妙國寺境内 「教」發行所 振替東京一〇九四〇番

統一 定價		
一冊	半年	一年
金貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢
送料共	送料共	送料共
五厘	五厘	五厘

統一 廣告料		
一頁	半頁	四分
金貳拾錢	金拾錢	金五錢
五厘	五厘	五厘

昭和七年五月廿四日印刷納本 (第四百四十七號) 昭和七年六月一日發行

編輯兼 磯部滿事 發行人 鈴木日雄 印刷所 東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地 電話高輪六〇二四番

發行所 統一發行所 編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ 振替東京五一〇七一番

目次

非常時—非常事 十章鈔講義(續)……………日生上人 齋藤實人 遍く教化關係の各位に告ぐ……………上田辰卯 今後の經濟はどうしたらよいらうか……………中村清一 阿含の根柢を探りて(其二)…………… 日生上人を憶ふ(其八)……………

記事 ○統一團協賛會々報 ○見聞錄 ○教報 ○團費誌料領收

